

広島俳句倶楽部

令和六年四月作品集

今年の梅

井藤希

毎年一月になると、梅の開花が楽しみになる。開花情報を見ながら、親梅の予定を立てたりなどする。ところが、今年は、昨年末に母を家で看取り、年明け早々、私が二度入院するなど、例年になく年末年始となつて、退院後も、親梅のことなど忘れていた。そういう中の二月初め、母の忌明け法要の寺で目についた紅梅が、自分の意識の中に、鮮烈な印象をもつて入ってきたのである。さて、それからは、毎年母を連れて行った縮景園をはじめ、いろいろな所で、例年以上に梅見をする次第となった。寒い季節に、たとえ古本になつても春の魁を感じさせる梅の花は、一年の季節の変わり目の中でも特別なものであるように私は思う。この花は、張り詰めた空気の中に季節が進む予感と明るい和みを皆にもたらししてくれるのだ。そして、今年の梅は、その思いを一層強く感じさせるものとなった。

梅東風や経を唱ふる七七日

お茶室の壁に添うたる梅の影

顔を上げ老いも若きも梅を嗅ぐ

嗅ぐ梅の高さ異なる夫婦かな

上向きに梅吸ふ鳥の一途なる

梅の香の風に向かひて歩きけり

梅潤む雨意の去らざる昼下り

梅林の三時の日差はや翳り

それぞれ根方に雨の梅散りぬ

地に零れ貼り絵となりし梅の花

《作品鑑賞》

すみれ

大変な歳を越されたんですね。気丈な希さんの様子が伺え、かくありたいと老いた我が夫婦の行く末を想い、鑑賞させて頂きました。法要後の紅梅は、それは美しかったでしょう。それがあつての「今年の梅」の作品は、慈愛に満ちた梅が、希さんらしく淡々と詠まれていて好感の持てる句でした。

梅東風や経を唱ふる七七日

早速に大切なお母様を想う映像が浮かび上がって来ます。介護の日々もあったでしょう。

上向きに梅吸ふ鳥の一途なる

「一途なる」が希さんの俳句だと感じさせてくれます。

梅潤む雨意の去らざる昼下り

感性の豊かさを感じさせられ、私には出てこない言葉の豊かさです。

地に零れ貼り絵となりし梅の花

美しい光景で梅の花を表現され素敵なお句で閉められ、良い作品を見せて頂きました。

雨がまた梅檀の実を濡らしけり

水鳥を見てから歩く宿場町

虎鵜処を変へて鳴きにけり

水仙に備中の日の暮れかかる

備中のこのあたり梅盛りなり

日は懸かり地に雲雀鳴き吉備国

案内され古墳訪ねる山桜

積もつては椿散る八幡の脇

吉備を癸ち安芸へと入れば春の雪

彼岸会の筈に吹く風歩きをり

山間にエンジンの青春田打

城濠に舟の留めあり春の水

傘を閉づ盛りの花を前にして

花水木咲き始めたる角の家

芍薬の一輪づつに風吹けり

藤の花モダンなビルの壁に揺れ

霾や夕日のハイウェイ行かば

風止みし夕べ景桜静かなり

足早に景桜の下人の過ぐ

陽子線治療を選び花は景に

風強き橋を渡れば寒桜

料峭の名を知らぬ鳥見上げをり

西へゆく車窓にしばし春の雪

億万の木の芽こぞりて天を指す

生きてゐることの嬉しき春日かな

日も風もあふるるほどやクロッカス

川風に梅はひと片づつ散れり

己が手にふとふれにけり雪柳

囀は川辺の道のそこかしこ

鴉の子鳴けば近くに返す声

佐保光俊

村上正人

高尾ひとみ

川沿ひに上る山道花辛夷

うぐひすの次の声待つ厨かな

谷川へ彼岸桜の散りしきる

春雨に濡れて僧来る夫忌日

上げ潮にいつも二羽なり残る鴨

橋脚をぐるりと廻り残る鴨

こでまりの花に山風吹いて来し

姿見の墨りひと拭き夏隣

行く春や破戸に釣人並びるて

景桜や上着を肩に中学生

あざみ

熱の母隣室に居て蝶の昼

春の風邪母にたづぶりカフエオーレ

春の風邪長引く母を目で追うて

向ひ合ひ子と朝ごはん春休み

ピアノ弾き子の帰り待つ春の夕

楽譜見つつその曲を聴く夕永し

切り株に雨後の春日の差しゐたり

散り果てし木蓮の前通り過ぐ

住宅街リヤカーのゆく春の月

ひとりゆくいつもの道や豆の花

亜矢

吾のため握るハンドル花の旅

夫と行く山路に千の桜かな

妖も行き交ひたるか夕桜

外つ国の客らと潜る糸桜

花の輪を飽くまで押さん車椅子

花散れば淡海の貝の蠢けり

立ち尽くす藤の静けさ正しさに

藤棚の静けさ破る熊ん蜂

朝の雨止みて藤浪絶え間なし

入学や吹奏楽の頼もしき

綾乃

杖を曳く道の先なる梅の花

知らぬ間に降つて積もつて春の雪

そよ風や足にふれたる雪柳

暗がりに向ひ増したる沈丁花

鯉と鰻並び泳げる春の水

打ち揃ひ花を選べる彼岸かな

木蓮をカフエに眺めて刻過ぎぬ

うらうらと雲動き出し日浦山

落椿また野良猫の通りけり

地下街に雀来てゐる四月かな

井藤希

初蝶や河口に小さき波頭

初産の娘に持たす菜飯かな

春霞赤い灯並ぶ埤頭かな

淀川の土手遠くして花菜風

菜の花や園児の頭見え隠れ

溜息も久伸も混じる花疲れ

制服の子の後ろから春日傘

春の雷夢見るうちに過ぎにけり

長雨の後に黄砂の朝かな

イヤホンを外す夜道や初蛙

栄吉

紅椿白い花瓶によく映えて

山桜いつもの山に咲き満ちて

満開の花のトンネル夫と行く

もう少し頑張らうかと桜見る

声今はセシヤンソン歌ふ春の風

故郷の地震の知らせ春の夜

黄心樹の花咲く宮に詣でけり

新緑に悲しきことも忘れをり

杜鵑近くの山で鳴き始む

夕暮に真つ白に咲く野薔薇かな

大畑恵

たんばばは鉄路に沿うて吹かれをり

朝風は菜の花畑の向うから

前山のまた煙りたる菜種梅雨

雪柳夜来の雨に撓みをり

倒木に亀一列や春の池

葱の花子からの雨降り暮る

夕長きと話しつつ取る庭の草

夜の更くる車窓から見て春の月

霾天の夕べは雨となりにけり

開け放つ母屋と納屋と夏近し

暁子

春雷におののく真夜の床の中

髪を切り衿元に吹く春の風

庭の巣箱出入りする鳥朝日受け

春の旅初めて子だけ乗る電車

我が横を付かず離れず蝶々飛ぶ

大手門隠す万朶の桜かな

見上ぐれば大き桜の中に居り

手弁当持つて出掛くる桜土手

風車掲げて走る子を追ひぬ

青草の匂ひ嗅ぎたく車止む

すみれ

一両目に立って見てゐる山桜

産土のそこだけ花の明りして

むくみたる母の足撫づ桜どき

手の平を添はせてみたり春三日月

桃の花すこしづつ切る母の爪

川風を背より受けて花浴ぶる

散る桜ときをり鯉の浮かび来て

桜散り曖昧となる水際かな

手の平で持ち上げてみる八重桜

旅人に景桜の影揺れてをり

知佳子

母のため庭の水仙花束に

馬鈴薯を植ゑて写真を母に見せ

馬鈴薯を植ゑたか友に電話する

故郷の土手に桜の苗木植う

友誘ひ団地の枝垂桜見に

幼子と桜の道をかけつこす

帰宅せり桜の花弁服に付き

プランターに並んで下がる大萵

幼子の萵摘みては頬張りぬ

幼子と競つて萵食べにけり

休館の図書館の梅咲きにけり

一輪の桜咲いたと友の声

背中から風に押さるる花の道

昼月や鏈れ合ひたる鶯の恋

花ミモザ漫ろ歩きを満喫す

花ミモザワイングラスを二脚出し

囀の続く一樹に友を待つ

菜種梅雨一人を良しと思へる日

潮騒やばどりと落つる藪椿

椽の芽のつやつやとして夕間暮

今年また春爛漫の庭に立つ

春の池鯉の泳ぎの緩やかに

少し離れ木蓮の花見上げたる

その辺をふらりと歩く長閑さよ

手を繋ぎ潜りし枝垂桜かな

柿萵きの横の桜の大きこと

四阿に座り桜を眺めたる

誘ひ多し桜さくらこの季節

見上げたる桜並木は雲の如

仰け反つて醍醐桜を見つめたる

ちどり

辻純江

雲雀

大束のアスパラガスを抱っこする

語り出す父の旧友柏餅

売り場にて鍊を覗む巨体かな

パトカーのごときジャンプや春の宵

春灯や次のシャッター降ろす前

発熱の検査結果や春の星

鷹の巣や地には風雨とデニムの紺

行春や帰った家の空気を吸う

菓子箱と半券並べ春惜しむ

雨ならばしないやらない暮の春

ふじ女

はくれんの一片づつに崩れけり

げんげ田や向うに若き父と母

クレソンや川底の砂よく動き

青空と海を見晴らす花菜畑

夕暮れて花菜明りの土手帰る

花菜雨傘を差さずに歩きけり

母入所ひとりで帰る花の道

道なりの杏の花の光は海

女医の居るデスクの横にスイートピー

恋猫の裏木戸開くる音のして

松田裕子

立春の空に鳩突つ社かな

朝東風に鴟ゆるりと乗りにけり

じやんけんで上る階段春の風

春ともし妻が笑顔で退院す

しばらくは鳥の影せる春障子

思ひ切る免許返納青き踏む

星朧親しき人は皆遠く

春塵や防災無線聞きづらく

人声に聞き耳立つる朝寝かな

かたかこの俯く花を好みけり

森口良樹

残雪をガリガリ踏んで山小屋へ

猫柳堰のしづきに揺れ止まず

囀に植ゑ替へてゐるポット苗

不意に来てすぐに隣へ紋白蝶

石室を覆ふ大樹の春落葉

囀の中暮れ泥む古墳群

係留の小舟を揺らし桜まじ

枝渡る鳥声響く花の宴

ゴルフ場の緩やかな道若緑

山野ウタ

つちふるや洗ひたてなる愛車へと

著休め小鉢にいつもの落葉草

吊るしたる鉢に数多の花萼

春潮や威風堂々たる鳥居

行く春や磨き込んだる夫の靴

山菜の苦みと香り春惜しむ

招かれて遠出してをり若菜風

大原良子

満開の牡丹の庭鎮もれる

日向から日蔭から見る牡丹かな

開け放ち牡丹の風入れにけり

牡丹の崩るるまでの日を数ふ

夕べには牡丹を剪ると決めてをり

牡丹を剪つて魔力の失せにけり

桑門わかこ

走り書き係へて草餅届きたり
車椅子止めて今年の花見かな
手を広げ走り出す子へ花吹雪
春の雨社より見る筑後川
溪谷へゆつくりと落つ石鹸玉
子雀の一瞬遅れ飛び立ちぬ

撫子

かしましく芽吹きをりけり道の草
丹精の庭早々に春景色
この辺り母座りたり雪柳
ぐるり見る雲一つなき春の空
ビルの上のアンテナの上鳥の巣

須美れい

時刻表膝に広げて春の旅
春風や備後訛りの案内受け
花冷の乗り継ぐ駅は県さかひ
花散るやロープウェイは昇りゆく
雪柳道へ自在に枝伸ばし

高梨英子

花あけび龍に挿したる座敷かな

花山葵添へてお肴の仕上りぬ

雨止んで牡丹華やぐ寺苑かな

茄子の苗頼み仕事の終りとす

紀英子

御朱印を頂いてきり笹子鳴く

石段を数へて上る春の雨

花の下お謡の出て人ばかり

町角に桜葉降るはらはらと

高嶋彌代

勾玉の里に見上げて初桜

収穫の水菜の根つこ団子虫

大株の水菜じやぶじやぶ洗ひたる

ちぬを焼き産後の母乳ふくませる

土肥律子

花明り寺の門へと続きをり

大桜向うに沈む夕日あり

あちこちに手拍子聞こゆ花の下

花吹雪母に抱かるる吾子の上

美耶

川土手の桜は今が見ごろなり

停車場六分ほどの花見かな

帰る雁サッカー場の上を飛ぶ

上島康子

桃の花かたはらに見る吉備路かな

墳丘を右回りしてつばくらめ

春の波寄する松原歩きたり

熊谷ゆり子

水仕事終へし窓辺に辛夷咲く

背伸びして甘茶かけたる花祭

ふらごこを少し揺らして微睡みぬ

みさ子

老桜の幹に三輪花ひらく

春うらら杖をお供に外歩き

民

落人の山の伝説花朧

すれ違ふセーラー服の四月かな

やす保

紅白の交互に植わる花水木

初虹や良い旅になる予感して

山崎桂子

令和六年三月度作品集より

亜矢 私の選んだ十句

冬枯の後円に立ち人の影
水温む県境の橋渡りけり
半時を妻と迎れる春の川
クロッカス行進曲の聞こえる
猛る野火川向うより見てをりぬ
足の指開く運動寒戻る
沓石に日の届きたり花董
満員のバスに畳みて雪の傘
春雨や大樹の先に坂つづき
オルゴール鳴らして雛を納めけり

佐保光俊
あざみ
井藤希
栄吉
ちどり
辻純江
森口良樹
土肥律子
美耶
山崎桂子

井藤希 私の選んだ十句

冬枯の後円に立ち人の影
木瓜の花夜の明くる毎色深め
西へ行く電車の窓に梅探す
一歩づつ雨後の落葉の匂ひ立つ
土筆摘むいつもの道の突き当たり
芽吹く山年で一番好きな色
初蝶のやうやく来たか庭の先
締め直す鍬の楔や別れ霜
末黒野の畦道をゆく使ひの子
嫁がせて二人となりぬ雛祭

佐保光俊
村上正人
高尾ひとみ
亜矢
栄吉
すみれ
松田裕子
森口良樹
山野ウタ
山崎桂子